

HITOTSUBATAGO NO. 5

ヒトツバタゴ



対馬生物研究会

December 1987

対馬の野鳥Ⅰ クイナ類

浦田明夫

クイナと言えば、1981年5月に沖縄本島北部で発見されたヤンバルクイナが印象的である。その後、山階鳥類研究所の研究者5名が現地入りし、6月18日、7月7日に2羽を捕獲し、標識をつけて再び沖縄本島の草原に放した。捕獲された2羽は成鳥♂と幼鳥1羽で、体長の割に翼が小さく、現地の小学校体育館で放し、観察しても飛翔せず、空は飛べないものとみられている。

このようにクイナ科の鳥は一般には、長距離は飛ばず、全く飛ばない仲間もいる。このヤンバルクイナは1984年に巣と卵が見つかり繁殖も確認されたが、クイナ類は日本ではヤンバルクイナを含めて11種が知られている。クイナ科の鳥は小形ないし中形の水辺の鳥で、大体スズメぐらいの大きさから中形カモ大で、首はやや長いが縮めていることが多く、足と指は長くするどい爪をもち、水辺の泥上や水草の上をすばやく歩く。人や動く物を見るとすぐかくれる性質が強く、なかなか人目にはつきにくい。

種 \ 地域	対馬	壱岐	長崎県	備考
1. オオバン		○	○	夏鳥又は留鳥
2. バン	○	○	○	夏鳥
3. クイナ	○	○	○	冬鳥

4. ヒクイナ	○	○	○	夏鳥
5. ヒメクイナ	○		○	夏鳥
6. シマクイナ			○	冬鳥
7. マミジロクイナ				1911年 絶滅種
8. ヤンバルクイナ				留鳥
9. オオクイナ				留鳥
10. ツルクイナ	○		○	?
11. シロハラクイナ	○		○	迷鳥
合 計	6	4	8	

長崎県におけるクイナ類の分布

バン Gallinula chloropus indica Blyth

ニワトリよりずっと小さい黒い鳥で、嘴は嘴と額が鮮紅色でよく目立つ。
湖沼、水田、川などの水上、水辺を好む。対馬には夏鳥として渡来する。

- ・ 1984年5月10日 1羽 美津島町久須が浜
- ・ 1985年4月21日 1羽 豊玉町仁位
- ・ 1985年5月26日 1羽 美津島町久須が浜
- ・ 1986年4月29日 2羽 上県町佐護
- ・ 1986年5月15日 2羽 上県町佐護

以上の他、厳原町（久田、小茂田、瀬、久根田舎）美津島町（鶏知）上県町（大浦）などの記録がある。

クイナ *Rallus aquaticus indicus* Blyth

バンよりひとまわり小さい褐色の鳥で、全身灰黄褐色に暗褐色の縦小斑がある。用心深く体を低めて歩き、草むらなどにひそんでいる。水田、湿地、小さな川などのヨシなどの発達した繁みを好む。対馬には冬鳥として渡来する。

・1961年9月27日 1羽 上県町佐護

上記の他、厳原町（小茂田）豊玉町（曾、仁位）などで観察されているが、単独でいることが多い。

ヒメクイナ *Porzana pusilla pusilla* (Pallas)

ズメより大きい。イソシギぐらいの大きさで、ずんぐりした灰褐色の鳥。一般に夏鳥で湖沼、河川、水田、湿ちなどのヨシや水草のよく繁った水辺を好む。

・1986年9月14日 1羽 厳原町豆蔵

境良朗氏捕獲のもので、筆者が同定した。

ヒクイナ *porzana fusca erythrothorax* (Temminck et Schlegel)

クイナより小さく、背面は暗緑色、頭と頸の全面、胸から腹にかけて赤褐色、足は赤く長い。水田、池沼、川など草深い水辺を好む。

・1986年5月 1羽 厳原町日吉

上記は対馬高校運動場測溝にいたものを生徒（江口豊優）が捕獲したもの

で、右大腿部を骨折していたため容易に捕獲できたものと思う。届けられた個体にミミズなどを与えたところよく捕食したが、翌々日死亡した。対馬高校の運動場は厳原の小高い丘の上であり、運動場の測溝付近は草でおおわれているが、水辺の鳥がどうしてこうした環境の所に飛来したかは不明である。以上の記録の他、厳原（竜良山山麓）上県町（佐護）などでも見つかっている。特に前者は1966年11月30日に観察されたものであり冬期の記録として珍しいものと思われる。

ツルクイナ *Gallicrex cinerea* (Gmelin)

夏羽の♂は一見バンの♂に似ているが、黒または褐色でバンより大きく、足は長い。特に♂は嘴は黄色で前頭部より頭頂にかけて赤く、頭頂では上方へ三角状にとがる。

・1987年6月 1日 1♂ 厳原町曲

・1987年8月27日 1♀ 美津島町洲藻

厳原町曲の梅野みどり氏が出漁中、曲沖数kmのところでは1羽の黒い鳥が船上に飛来してきた。近づいても逃げなかったのでカゴに入れて持ち帰った。図鑑を見てヤンバルクイナと思い、厳原町教育委員会に連絡、つづいて筆者のもとにも知らせがきたので、早速調査に行ったところツルクイナと判明した。やや弱っていたので筆者が引きとり、翌日、久田お船江で放鳥した。一旦、お船江の干潟に飛びだし、周囲を見まわした後、繁みの方へ一目散にかけこんで行った。カゴから飛びだしても飛翔は行わず、両足を交互に動かし非常な速さで走りだした。

ツルクイナはその生態はほとんど知られず不明な点が多い。陸から数km離れた海上の漁船に飛来したのは渡りの途中の疲労をいやすためか、あるいは

他の鳥に追われたためではないかと思われる。

シロハラクイナ *Amaurornis phoenicurus chinensis* (Boddaert)

元来、中国南部に分布するが、日本では沖縄以南に生息し、鹿児島県では繁殖が確認されているが、他の地域では迷蝶鳥と考えられている。

・1975年5月 1羽 上県町佐護

上記の他、本種は未発表の記録がかなりあり、対馬では毎年のように春の渡りの頃観察されている。

上面は黒色で、顔から下面は白く、下腹から下尾筒は赤褐色、嘴の基部は赤い。水田や湿地、小さな川、マングローブ林の水路などによく見られ、藪かげの水辺に来て採食する。

(うらた・あきお 対馬高等学校)

HITOTSUBATAGO No.5

ヤツガシラ夏の記録

浦田明夫

対馬のヤツガシラ (*Upupa epops saturata* Lonnberg) の記録の一部については、長崎県生物学会誌 No.31にまとめた。

本種はユーラシア大陸の南半分、北米の一部、南アフリカ、マダガスカルなどに分布し、世界中にはヤツガシラ科は一種しか知られていない。日本では主に旅鳥で、春と秋に渡来するが多くない。これまでの観察では草地、農耕地、川原、芝生、果樹園、道路上などで後頸を前後に動かしながら、地上

を歩いて昆虫やミミズなどを食べている。

対馬では3月の始め頃より4月頃まで渡来するのが普通であるが、1987年7月10日、珍しい鳥のようだと筆者のもとに届けられたのが、このヤツガシラであった。対馬では、この時期の記録はかつてなく、

- (1) 渡来してそのまま居すわってしまった
- (2) 遅れてやっとこの時期渡来
- (3) 繁殖の可能性もある
- (4) 一部留鳥

など考えられる。いずれにしても、この鳥の特殊な形と色彩で他種と見誤ることはないので、今後の情報を提供していただければ幸いである。

ヤツガシラ

発見日 1987年7月10日 死体1

場 所 厳原町内院

庄司清磨

最後であるが、標本を提供いただいた庄司氏へお礼申し上げる。

(対馬高等学校)

悪食体験 // クサギノムシを食べる

浦田明夫

“先生、これ食べられますか。”生徒はそんなことをよく聞く。“あっ食べられるよ、ただそれが栄養になるか、薬になるか、毒になるかはわからんぞ!”と言うと“食べられないんだなあ”と勝手に解釈してしまうようである。

筆者は今まで、いわゆるゲテモノと言われるものをかなり食べたのではないかと思う。ただこれも好奇心で試みているだけなのである。ナマコを最初に食べた人は相当な勇気がいったのではないかと仲間でよく話すが、東南アジアやアフリカなどでは、我々が想像もできないようなものを、平気でおいしそうに食べている光景をテレビなどで見ることがある。それは人種による環境と過去からの経験をふまえてのもので地域性の違いからであろう。

さて、筆者は小学校3年生までを対馬上県町佐須奈で生活していた。そしてその間、父は上対馬町比田勝などによく連れていってくれた。当時(昭和10年代)は小型の乗合自動車が佐須奈、比田勝間を数回通っていたが、歩いて行くことが多かった。その途中、父はクサギノムシをよくとっていた。クサギノムシは、主としてクサギの幹に生息している。この幹に直径数センチの半球状の瘤がみられるが、これは木のクズや糞でかためられたもので容易に取り除くことができる。これを除去すると深い穴がみられて、この中にクサギノムシが潜んでいるのである。この穴を前後して切り取り、家に持って帰るのである。家でこれを縦裂きするか、穴にタバコの煙を吹きこむと頭を出すので簡単に引張り出すこともできる。このクサギノムシをそのままクシ

ザシにして（砂糖）醤油につけて火に焙って食べるのであるが、これがなかなか美味なのである。当時は食糧難の時代であったにしろ本当においしく食べたものである。その後、このムシのことはすっかり忘れてしまっていたが、今年（1987）ある本を読んでいたところ、クサギノムシに関する一文が目にとまり、父とともによくとって食べたことを思い出した。しかし、現在これを食べてみようという気持ちはさらさらない。

さて、それではこのクサギノムシの正体は何であろうか。当時は筆者が小学校就学前から低学年の幼少時代で、何であったかは全く考えてもみなかったが、現在それを学究的に調べてみると、これがなんとコウモリガという蛾の幼虫なのである。コウモリガは体長35～44mm、翅の開長81～91mmの大形の蛾であるが、成虫は5～10月に出現するようである。対馬でも気をつけてみれば、発見することは容易であろう。この蛾は夕方、比較的活発に飛び交うが、コウモリのような飛び方をするのでコウモリガという和名が与えられたものと思う。活発な飛翔力をもつが、捕獲すると擬死をよそおったりするのも面白い。

さて、このクサギムシはクサギの他、キリ、ブドウ、トウモロコシ、イタドリなどを食樹とし、クサギノズイムシ、クサギノテッポウムシ、クサギノシンクイムシ、キリノムシ、キリノテッポウムシ、ヤナギノムシなどとも呼ばれ、全国的に食用、薬用とされ小児の疳や胃にもきき、時には強壯剤、解毒、解熱剤として用いられるという。

もし、現在勇気のある人がいたら、このクサギノムシを試食してみたいかがでしょう。

（追記）

脱稿後、ある事情で豊玉町塩浜の吉村保氏と親交を保つようになった。大正5年生れの彼は長い間軍隊生活を送り、特に戦争中は、ソロモン群島をは

をはじめ南方諸島で活躍した戦士であった。そして戦渦の中、飢えと弾丸の間をくぐりぬけ、昭和21年無事帰還されたが、ソロモン群島での戦死者のほとんどは飢えであったという。死んでいく兵士の中には、もう一度米が食べたいと言っていた者もあったそうである。彼は低緯度のこの地方で、多くの植物の種子や果実、新芽の他、バショウ（バナナ）の地下茎などをあさり、動物ではカエル類をよく食べていた。皮をはぎ、そのまま生で食べるのである。敵（米軍）見つかるということで火は使えないからである。ヘビや小形のトカゲも皮をはぎ食べた。大形のクモは頭の部分と脚を除いて腹部だけを食べた。しかし、ムカデなどの多足類はどうしても食べることはできなかったそうである。

「今、それを食べることができますか」たずねると、即座に“N o”の答が返ってきた。栄養にも腹のたしにもほとんどならないクモなどを食べたということは、今考えてみると驚異だと述懐されている。

ツマグロヒョウモンの食草

浦田明夫

ツマグロヒョウモンは、対馬のヒョウモンチョウ類の中では最も普通に産し、早春から秋まで見られる。ヒョウモンチョウ類はツマグロヒョウモンに限らず、ほとんどが各種スミレ類を食草としている。さて、これまで、筆者が自然状態で飼育した本種の食草について略記したい。

(1) スミレ

○長崎市西山町 1987年

自宅前のスミレ科スミレを食べていた一頭を飼育した。

○対馬峰町

飼育の十分なデータはとっていないが、峰町対馬青年の家の庭で採集した4頭の終令幼虫を飼育し蛹を得たが、その蛹は来島していた鹿児島県の小4の小島康久君にさしあげたが、後、鹿児島で4頭羽化したとの連絡を受けた。食草はスミレ科スミレである。

(2) パンジー

○長崎市長崎東高校 1981年

長崎東高校2階で、プランタに育てたパンジーを食している幼虫多数を見つけ、これで飼育し羽化させることができた。

(3) ナンザンスミレ

○対馬厳原町宮谷 1987年

筆者は庭に対馬のスミレ類を栽培して楽しんでいる。これにツマグロヒョウモンが飛来していたが、別に気にもとめていなかった。しかしやがて、この鉢植えのスミレが食べられているのに気づいた。そして

よく見ると、その全部が対馬特産のナンザンスミレばかりであった。ナンザンスミレは十鉢、他のスミレは4～5鉢ずつ植えていたが、それにしても他のスミレ類（スミレ、シハイスミレ、シロコスミレ等）は全く食べず、ナンザンスミレだけを食べていた。ナンザンスミレは葉の形はエイザンスミレやヒゴスミレに似ており、ニンジンのような葉をしているので、葉からはスミレのような感じを受けない。このツマグロヒョウモンは、対馬以外の地域では見られないナンザンスミレをお気に召したものと思う。幼虫を捕獲し、以後ナンザンスミレで飼育し4あたまのツマグロヒョウモンが羽化した。

（対馬高等学校）

HITOTSUBATAGO No. 5

1987年対馬のゼフィルス

浦田明夫

久し振りにゼイルスに逢ってみたい。急に思いつき、大船越へと向かった。大船越はかつて筆者がアカシジミやミズイロオナガシジミを初めて採集したところであるが、十数年ぶりの訪問で、その環境が全く変わってしまった。自分の庭のように歩きまわった所が植性が変わっただけでなく、地形まで過去の面影がないほどの変わりようだとまどってしまった。しかし、せっかく来たんだからと注意していると、やがてミズイロオナガシジミが歓迎の舞とでも言おうかひらひらと飛んできた。これで無事生息していたことが確認できただけで来た甲斐があったと思う。この日は風が強く曇りがち、採集には向く日ではないが、比較的風が当たらない所を選んで次の飛来を待っていた。時には近くの樹冠を叩きながら・・・。

結局この日は多数の目撃の中から、下記のようなものを採集することができた。

昭和62年6月7日

対馬美津島町大船越

- ・ テングチョウ 2
- ・ アカタテハ 1
- ・ ゴマダラチョウ 1
- ・ アカシジミ 1
- ・ ウラジロミドリ 2
- ・ ミズイロオナガ 4

浦田明夫 採集保管

ゴマダラチョウ、ウラジロミドリ、ミズイロオナガの生態写真も撮影できた。

さて、翌々日（9日）代休のため、また同地を訪れた。採集中、小雨など降り、条件は最悪となったが結局下記のような採集ができた。

昭和62年6月9日

対馬美津島町大船越

- ・ ゴマダラチョウ 1
- ・ ミズイロオナガ 11
- ・ ウラジロミドリ 1

浦田明夫 採集保管

対馬にはこの他キリシマミドリシジミが有明山他で記録されているが、今年も有明山に登る機会に恵まれず、長い間本種にはお目にかかっている。またオオミドリシジミは、大船越で採集できるのだが今回は期待だけで終わった。

1987年対馬の迷蝶

境 良朗 杉 憲

本年度（1987年）採集された迷蝶の記録を報告する。

○ ウスキシロチョウ

8月26日 豆殿 1♂1♀ 境

○ メスアカムラサキ

8月1日 千俵蒔 1♂ 杉

○ リュウキュウムラサキ

7月26日 豆殿 1♂ 境

9月20日 上見坂 1♀ 杉（ジャワ型）

○ カバマダラ

7月28日 畠浦 1♀ 杉

8月23日 豆殿 1♂ 境 千壽子

8月26日 豆殿 1♀ 境

（志多賀小・鴨居瀬小）

プレファリスマについて

木原修一

先日、教育センターの研修講座に出席した時に、微生物をわけてもらいましたので紹介します。

○ プレファリスマ *Blepharisma undulans Japonicus*

ゾウリムシの大形のものと考えてもらえればよいと思います。プレファリスマは実際は4種類あるそうですが、培養方法から考えると上記の学名のものと思われま

す。体長150 ~ 500 μm 、まれに 700 μm 前後、濃赤色。前半が幾分細まる紡錘形。体の前半は偏平であるが、後半は丸みをおびる。囲口部は浅い溝をつくって前方の3分の1を占め、溝の内には繊毛の横列の板が前後に並ぶ。囲口部を除いた体部の繊毛は10~14 μm の長さで、一様に生じている。大核は棒状であるが、両端は幾分ふくれるため、引き伸びた亜鈴状に見える。小核は楕円形で大核に密接し、2 ~ 22個存在する。食胞は体の後半に限ってみられる。収縮胞は体の後端に存在する。水田に見られ、また干し草を浸した液中によく発生する。米沢市で発見されている。

《培地》

麦わら (500ccの水に10cm位に切ったわらを数本) を煮沸した液の中に 3 ~ 4粒入れたもの。

1か月に1回くらいは培地を新しくする。特に米粒の補給を忘れないようにすることです。大形でしかも動きがにぶいので観察しやすいとのこと。先日、培地を作りかえた時に ($\times 20$) で増えているのが観察されました。

野外観察・採集用具自作のすすめ

境 良朗

いまの子どもたちは、自然に接することが少なくなったと言われる。子どもたちを取りまく人的、物的環境の変化によるものなのだろうか。しかし、子どもたちに直に接している私達には、子どもたちの自然に対する欲求、あこがれ、驚きといったものは、本質的にはなんら変わっていないように思われる。

採集を通して、子どもたちは多種多様な生きた昆虫にじかに接し、かれらの生命躍如とした生活や行動の実態を観察し、さらにまた標本を通じて、自然あるいは生命の神秘さに心を打たれる。教師にとっても、こうした経験を積むことは、きわめて重要であって、自然ないし昆虫の世界に対する認識をいっそう深め、同時に創造性豊かな力量のある指導力を養う側面をもつものと思われる。

クラブ活動として、生物クラブを編成した。6年生1名、5年生2名、4年生2名の計5名の少人数である。野外活動が中心となるので、少人数のほうが色々な面で制約を受けることが少なく都合がよい。

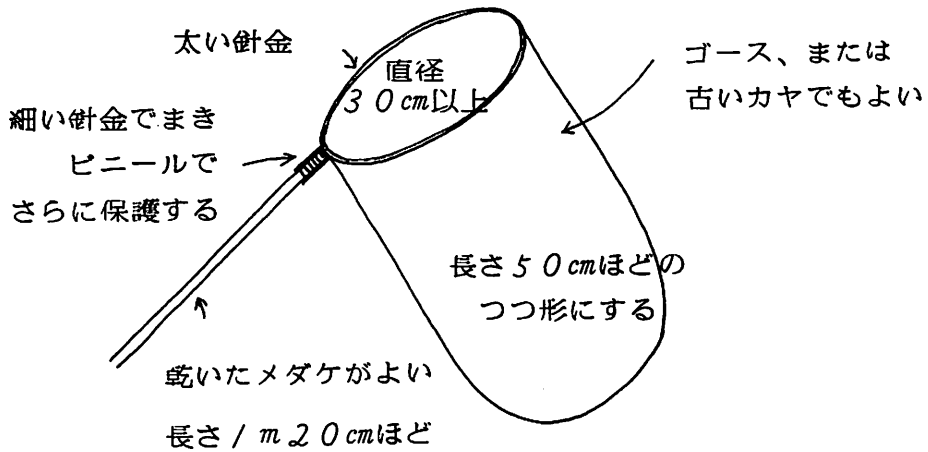
テーマを、「校区内の昆虫の分布調査」と決め、この1年活動を行ってきた。

主な活動内容として、次のことを設定した。

- ◆ 採集用具の自作とその正しい使い方を知る。
- ◆ 基本的な採集の方法を知る。
- ◆ 標本作成の手順を知り、美しい標本を作ることができる。
- ◆ 昆虫の生活を観察し、記録に残す。
- ◆ 対馬を代表する生物について、本で調べまとめる。
- ◆ 水生昆虫の採集方法を知るとともに、顕微鏡の正しい使い方を習得する。

ここでは、比較的安価で簡単にできる自作用具を紹介してみたい。

★ 捕虫網 ★

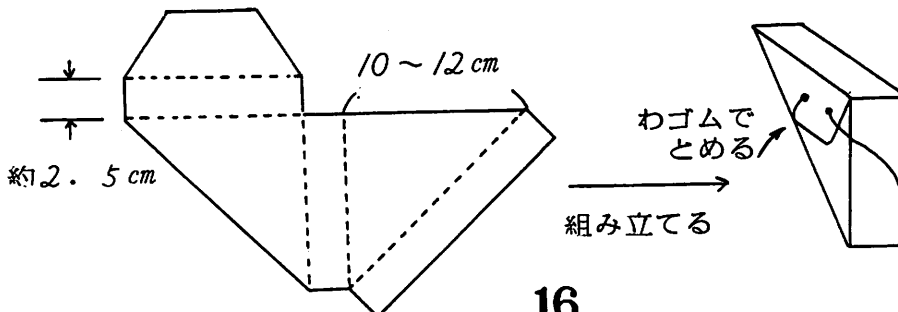


このほかに、捕虫網としては理振の水網、プランクトンネットがあるが、これはゲンゴロウの仲間やヤゴなどの水生昆虫および微生物を採集するとき用いる。

★ 三角かん ★

蝶やトンボなどを採集するとき使う。皮製、塩ビ製のものが市販されているが高価だし、1年間ぐらいだったら厚紙（白表紙）で十分間に合う。

中に入れる三角紙は、パラフィン紙を使う。

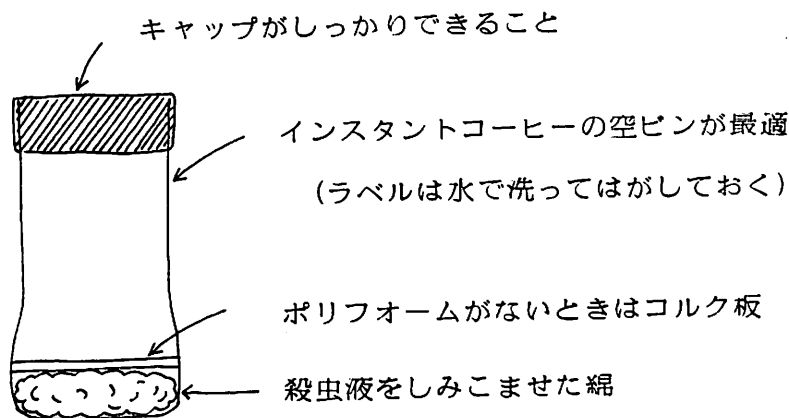


★ 毒ビン ★

テントウムシ、クワガタムシなどの甲虫類、ハチ、アブの仲間
蟻などを殺すときに用いる。

まず、ビンの底に綿をしき、殺虫液を適量ピペットで流し込む。
殺虫液にもいろいろあるが、安全性、効力、入手のしやすさなどか
ら酢酸エチルが最適。一応、劇物扱いになっているので注意する。

その上に、ポリホーム（またはコルク板）を置くが、パンチで穴
をあけておくと効きめが強い。



★ メモ帳 ★

せっかく採集してきたり観察したりしても、記録がしっかりと
られていなければ何にもならない。無駄な殺生をしないためにも最低
次のことは記録にとどめるようにする。

- ① 採集（観察）年月日 ② 場所 ③ 採集（観察）者指名

また、観察記録をとる場合に1番大切なことは、事実と感想を区別
して記述することである。

昆虫を採集するとき、この4つの道具があればほとんど不自由することは
ない。蝶やトンボを殺すとき、殺虫液で注射するのではないかと今だに思っ

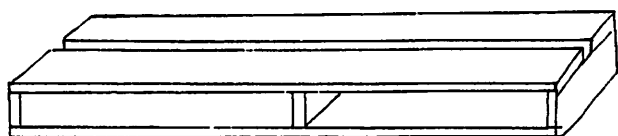
ている人が多い。注射器は、採集には全く必要がない。

採集してきたものを、どのように生かしていくかは大切なことであるが、いずれにしても標本としてのこすまが重要なことである。具体的な採集の仕方や殺虫の方法、標本作成の手順などについては、多くの書物が出ているので是非読んでいただきたい。

次に、こどもたちに1番なじみの深いチョウ、トンボ、クワガタムシなどの甲虫類について、簡単に標本作成までの手順について述べてみたい。

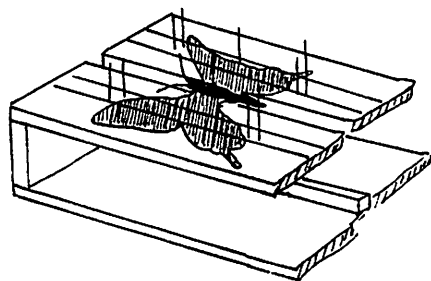
◎ チョウ

- ① 捕虫網で採集したら、はねの鱗粉を落とさないように注意しながら、胸を親指と人差し指で軽く押えて殺す。
- ② 三角紙に包み、三角かんにしまう。
- ③ 展翅板を使って、展しする。(下図参照)
- ④ 半月～1か月そのままにしておき、乾燥したら展翅板からはずす。
- ⑤ ラベルをつけて、標本箱に収める。



展翅板

木版画などに用いる合板
ベニヤを使えば自作できる



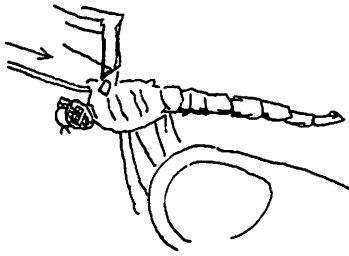
展翅しているチョウ

ラベルの例

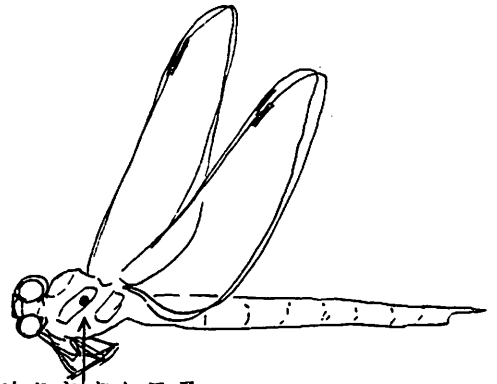
モンシロチョウ	
採集日	1986年5月13日
採集地	志多賀
採集者	大石恵士

◎ トンボ

- ① 採集したら、三角紙につつま冷蔵庫か、なければゴキブリなどの害の及ばない乾燥した場所に置く。
- ② この乾燥を十分に行わないと、トンボは肉食なので後で腐って、腹部が落ちたり、いやなおいがする。
- ③ ②を防ぐために、腹部に細いワラや竹を削った芯を入れておくのもよい。
- ④ 胸部に横から針をさし、ラベルをつけて標本箱に収める。



胸部から腹部にかけてしんをとおしているところ



針をさすところ

◎ 甲虫類

- ① 採集したら、毒ビンに入れてこす。1度に何びきもいれたり、小さい虫と大きな虫をいっしょに入れると、虫どうしが傷付け合ってよくない。
- ② まだ虫が動いている間は、取り出さない。
- ③ 展足板の上で6本のあしをきれいに整え2～3週間ほど乾燥する。
- ④ 小さいものは、台紙にのりではりつけ台紙を針で刺す。中型から大型のものは、直接、右上ばねに針を刺す。

